



Title	地域日本語活動の現場から：ボランティアの意識における、「やりがい」の循環と「教えること」の固定化
Author(s)	新庄, あいみ
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集. 2008, 12, p. 87-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50663
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

地域日本語活動の現場から

－ボランティアの意識における、「やりがい」の循環と「教えること」の固定化－

新庄 あいみ*

要 旨

地域日本語活動における問題の所在を明らかにするために、活動に参加するボランティアの意識調査を2回実施した。本稿では、2回の調査を比較分析し、その結果からボランティアの意識変化と「教える／教えられる」という関係性の固定化との関係を報告する。

【キーワード】地域日本語活動、ボランティア市民、やりがいの循環、教えることの固定化

1 はじめに

200万人を超えた在住外国人のうち、多くの外国人は、経済的・時間的な余裕のなさから、日本語学校などで日本語を学習して習得することが可能な状況ではない。かれらが日本語を学習しようとしたとき向かう場所のひとつに、無償かそれに近い状態で参加できる地域日本語活動がある。

本稿においては「地域日本語活動」と呼ぶ、ボランティア市民中心の在住外国人のための日本語に関する活動は、その場に参加する日本人のボランティアと外国人参加者の非対称的な関係性の固定化が、日本社会におけるマジョリティ（日本人）とマイノリティ（外国人）の間の権力構造の再生産であると指摘され、活動のあり方についての議論が多数行われている（野元 1996、田中 1996、古川・山田 1996）。

御館（2007）は、中国大陆出身の研修生やかれらとかかわる日本人へのインタビューから、地域日本語活動が、その場に参加する人々の相互作用のなかで再構築されるものであることを明らかにした。その示唆から得られることは、日本社会における地域日本語活動が実際に人々の間でどのように構築されているのかを明らかにするためには、その場に参加する人々の意識を知ることが必要だということである。本研究においては、産声を上げたばかりのボランティアグループ

を対象とし、地域日本語活動を描くことにする。調査は活動開始直後と1クールの活動終了後の計2回実施している。本稿においては、既に新庄・西口（2007）で報告した1回目の調査と比較することで見えてきたボランティアの意識の変容がどのように地域日本語活動における「教える／教えられる」という関係性に結びつくのかについて述べる。

2 グループの活動概要

本研究が対象とする活動は、大阪府下で活動する「X会¹」というグループである。X会は2006年5月から活動を開始した会で、会則によると、「『X会』は、日本語学習支援活動を主な活動として、Z大学の外国人研究者やその家族と交流する仲間の会である。」と、会の趣旨が掲げられている。会員の特徴として挙げられるのは、その多くが定年退職者などであり、60歳代が中心となっていることである。また45名の会員登録のうち9割近くが、国際交流関係の講座の修了生であることが縁で活動しているメンバーである。

グループが実際に行っている主な活動は2点ある。1点は会が直接運営する活動であり、「漢字テーブル」というものである。もう1点は、Z大学の留学生センターの教員の要請に基づく日本語クラスの参加である。これらのうち、本研究の対象となる「漢字テーブル」

* 大阪大学留学生センター非常勤講師

とは、週に1回90分開かれ、市販されている漢字のテキストなどを使い、外国人参加者の漢字学習をサポートするという活動である。参加者はZ大学に所属する留学生、外国人研究者、及びその家族が参加しており、X会のメンバーの参加者は20名程度で、基本的にボランティアと外国人参加者が1対1になる形態が取られている。一見、活動は「漢字」に特化しているように見えるものの、漢字以外にも、例えば会話の相手となってほしいという要望や、漢字以外のテキストを用いて学習したいという外国人参加者もあり、そういう場合は相手の要望に沿うように外国人学習者と日本語ボランティアの間で柔軟に対応しているようである。

本研究は、アンケート調査という手法を用いるが、調査資料には自由記述欄を多く設けることで、できる限り一人ひとりの声を聞き取れるよう努めた。調査対象者は、地域日本語活動に参加するボランティアの意識を探るために、登録者全体ではなく、実際に活動している会員で、かつ、「漢字テーブル」に参加している者を対象にアンケート調査を実施した。

調査は、第1回目として活動開始直後2006年6月と、第2回目として1年間の活動終了後である2007年2月にアンケート方法を用いて行った。回収されたアンケートは、第1回目は20名分（回収率95.2%）、第2回目は17名分（回収率81.0%）であった。なお、文章中にアンケートで回答されたコメントを引用する場合は「」で示し、文末に（）内に回答者のイニシャルを示す。イニシャルが重複する場合は、適宜別のアルファベットを使用した。

3 なぜ地域日本語活動に参加するのか

ボランティア市民は、なぜ地域日本語活動に参加したのか。地域日本語活動において、「ボランティア」という言葉の定義はあいまいであるが、一般的な認識を述べれば、「社会事業に自発的に参加する人々」と「無償奉仕する人々」という二つの意味があると思われる。では、参加者たちは、どうして自発的に地域日本語活動に参加しようと思い立ったのだろうか。その

ことを明らかにするために、第1回目のアンケートでは参加の動機について尋ねた。その結果、アンケートの「日本語ボランティアを始めた理由／きっかけ／動機等はなんですか」という質問に対する回答は、大別して「海外での経験：5名」と「国際交流・支援への興味や関心：12名」2点に分類することができる²。以下参加者のコメントを参照しながらボランティア市民の動機を見ていきたい。

まず、「海外での経験」については、参加者自身の仕事の都合や家族の都合で海外に居住したときの体験が語られる。例えば、「自分が、ニューヨークに3年近く（英語ボランティアの支援を）受けたことへのお礼がまずしたかった（O）」、「アメリカ駐在17年間で、最初の駐在地NYで、NYのボランティアの人に英語を教えてもらったことが動機（J）」、「1970年代、北米滞在中に接した人々の市民意識、人情、生活などに深い感銘を受けたこと（G）」といったエピソードが語られる。それは、自分が海外で「外国人」として生活していたときにホスト住民から受けた「恩」を、同じように、日本社会における「外国人」に返すことで、かつての恩人に「恩返し」をしたいという、「『恩』返しの循環（新庄・西口2007）」という意識である。

次に、「国際交流・支援への興味や関心」には、「異文化に対する関心、興味が強いこと。以前娘が2年間中国の大学に中国語と歴史学習に留学したことがあり、この様なことが基になり、若い留学生を支援したいと思うようになったこと（E）」、「長年、英会話を続けていて、外国の方から、日本語でどういうのですかと聞かれることが多く、国際交流に関心があったので（W）」といった声が上げられた。これらのボランティアの声からは、外国や外国人との接触を基本的な関心事とし、日本語ボランティアという手段を用いて自分の興味関心と広く深く繋がろうとしている姿が窺える。

グループの参加者の特徴として挙げられるのが、外国や外国人に関係する団体に元々所属していたという経験である³。その経験は第1回目のアンケート上に色濃く現れる。「その（講座に参加して得た）知識を社会に還元したい（I）」、「留学生の方々の日本語習得

のお手伝いができるれば、また日本の事情・日本文化を普通の生活者として伝えたい。外国で暮らす人の役に立ちたい（K）」などである。ボランティアの人々が、外国や外国人に関する団体や講座などに参加した理由については直接示されてはいないが、アンケートの記述には「国際交流」や「外国人市民への支援」という志向性が明瞭に表れている。また、「雇用能力開発機構の『日本語教師育成科』を受講修了したので、これを生かしたいと考えた（H）」という言葉が表すように、「国際交流」などの志向性に沿って行った研修や勉学の成果を、「役に立たせたい」というボランティア市民の二次的な志向を感じ取ることができる。

以上の「海外での経験」、「国際交流・支援への興味や関心」というコメントから見えてきたボランティア市民の地域日本語活動への参加動機についてまとめると、

- ①. 外国・外国人への興味関心
- ②. ①を基盤として、外国人を支援する者の立場で活動に参加すること

という2点の要素が抽出される。また、これらの動機は、活動で得たいことは何かを問うた質問項目（第1回目調査：質問項目8、「X会で、得たいこと／実現したいこと／実践したいこと等はありますか？」）において回答されたコメントからも窺える。例えば①に関しては、「留学生の方の国のこといろいろと学ばせてもらいたいと思います（E）」、「それぞれの国の歌を聞いてみたい（Y）」、「色々な国の異文化（言語も含む）に触れたい（S）」などである。また②に関しては、「日本文化を生活者（庶民）の立場から伝えること（K）」、「日本語を学んでられる方々が喜ばれ、日本での生活を楽しく過ごされ、それをお国に持つて帰られるようにしたいと思います（Q）」、「日本に対して良い印象を持って帰国してくれるよう努力したい（A）」という声が上げられた。つまり、ボランティアが地域日本語活動に参加する動機とは、自分の海外体験や元々あった異文化への興味関心から、外国人と交流を深めながら、かれらの日本での生活のな

かで自分がその一助となねばと願う意識なのである。

以上のように、国際交流的な関心から地域日本語活動に参加したボランティアではあるが、第2回目の調査においては「支援すること」のみが表面化していく。このような変化が起こったのはなぜかということを念頭におきながら、さらにボランティアの意識を見ていこう。

4 活動内容についての意識

地域日本語活動で、実際に外国人参加者を目の前にして日本語ボランティアは何を行っているのだろうか。アンケートでは、以下の項目から、自分が該当する項目を選んでもらった。なお、複数回答を可にしていることに加えて1回目と2回目で回収数も異なることから値は回答者全体における回答数の割合を表示している。結果は、1回目と2回目のアンケートをそれぞれ示したうえで、それらを比較しながら日本語ボランティアの意識が、実際に活動を行うなかでどのように変化していくのかを見ていく。質問内容は以下の通りである。

質問：X会において、一緒に勉強している外国人参加者の人とどのような活動をしていますか。次の項目から該当する番号に○をつけてください。該当する項目であればいくつでも○をつけてください。

1. テキストを使いながら教えている。
2. 漢字の本を音読しながら、漢字の読み方や書き方を確認している。
3. 日本語の文法や漢字について聞かれるので、それについて答えている。
4. 1～3のようなことをしながら、関連でおしゃべりをしている。
5. 相手の国のことや日本での生活のことを聞きながらよく話し合っている。
6. 相手から色々な話を聞いている。
7. 自分の普段の生活や家族のこと、自分の趣味のことなどをよく話している。

8. 日本の生活や習慣について聞かれるので、それについて答えている。
9. おしゃべりのなかで日本語の文法や漢字について聞かれるので、それについて答えている。
10. 外国人参加者の愚痴を聞いている。
11. 自分の愚痴を聞いてもらっている。
12. その他（具体的に：）

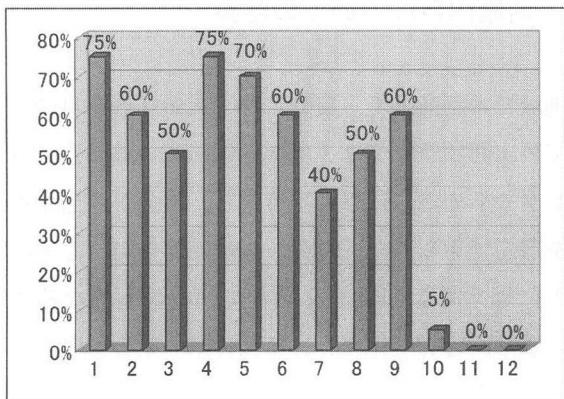


図1 活動の中身について（第1回目調査結果）

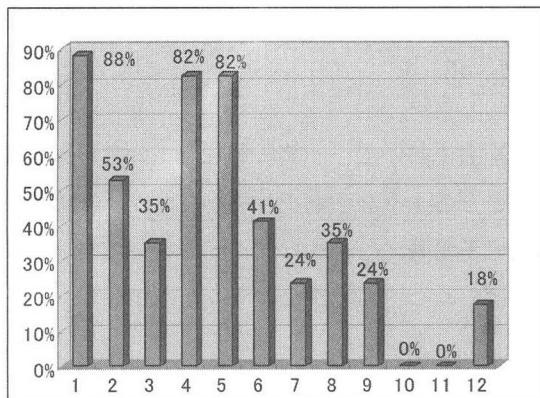


図2 活動の中身について（第2回目調査結果）

まず、質問項目を設定した際の意図について述べると、大きな枠組みとして1から4までの質問群Aと、5から11までの質問群Bとに分かれる。質問群A（1～4）は、「テキストを中心に活動している、あるいは、テキストをきっかけとして活動している」という、日本語教育を意識した活動を主な目的として据えているかを尋ねる質問であり、質問群B（5～11）は、「おしゃべりを中心に活動している」という、異なる言語・文化的背景を持つ人々との交流を意識して

いるかを問う質問である⁴。

質問群A（1～4）：テキストを中心に活動している、あるいは、テキストをきっかけとして活動している。

質問群B（5～11）：おしゃべりを中心に活動している。

上記の点から図1の第一回目の調査結果を概観すると、項目10および11を除いて、軒並み同じような回答数であった。

回答数が著しく低かった項目10及び11についてまず述べると、それらの質問の特徴は、「愚痴」つまり「他人に言っても仕方のないことを嘆く」という点で、自分の日常生活におけるネガティブな話題を相手に表示しているかどうかについて尋ねる質問であった。この回答数が低かったことの理由は2点考えられる。1点は愚痴を言い合えるような親しい関係性がまだできあがってはいなかったという理由、もう1点は「日本語母語話者／非日本語母語話者」という関係や年齢差、性差といった点から目上・目的な関係性が生じ、その結果「愚痴」をいうことができなかつたという理由である。これらの点については、深く言及することはできないが回答の可能性として挙げができるものと思われる。

一方で、項目1から9までを見ると、ボランティアの人々は「テキストを用いて教える」という日本語学習支援とともに、「相手の国や日本の文化や習慣について話をする」という「おしゃべり」をしていることが見受けられる。そしてこれらの点は、前節で挙げた地域日本語活動の参加動機として挙げられた「①外国・外国人への興味関心、②①を基盤として外国人を支援する者の立場で活動に参加すること」に関連している。

第2回目の回答結果は、第1回目に比べると平均的ではないが、質問群Aの1、4と質問群Bの5にほぼ全員が回答しており、第1回目と同様に、テキストを中心とした日本語学習支援に加えて「おしゃべり」も行うという認識がボランティアにはあるといえる。但し、第2回目の調査では質問群Bにおいて項

目 5 以外の割合が下がっていることから、お互いの文化や日常生活に関する「おしゃべり」をする人が減少したようである。そのうえ、項目 7 と項目 8 の結果⁵からは、微妙な差はあるが、日本語ボランティアは「日本」という大きな枠組みでの文化や習慣については説明しているが、自分の家庭における日本文化を話題にすることの優先順位は低いということが示されている。

以上をまとめると次のことが言える。活動の内容はテキストを中心に日常生活に関する話題も行われるという流れであるという認識は 1 年を通して共通している。しかし、話題の選択に関しては、活動開始直後はテキストや互いの文化などが平均的に用いられていたことが、1 クール終了後にはテキストの内容が中心となり、日常生活に関する事柄は周縁的な話題へと変化している。

上記の傾向を加味しながら、次に外国人参加者と自分の発話量の割合についての認識結果を見てみたい。まず、質問項目を示してから、その結果を図で示す。

質問：TN会の活動をしている間、あなたとパートナーの人のおしゃべりの割合は次に挙げる項目のうち、どれに該当しますか。○をつけてください。（おおよその割合でお考えください。）

1. 私 20 % : 相手 80 %
2. 私 40 % : 相手 60 %
3. 私 50 % : 相手 50 %
4. 私 60 % : 相手 40 %
5. 私 80 % : 相手 20 %

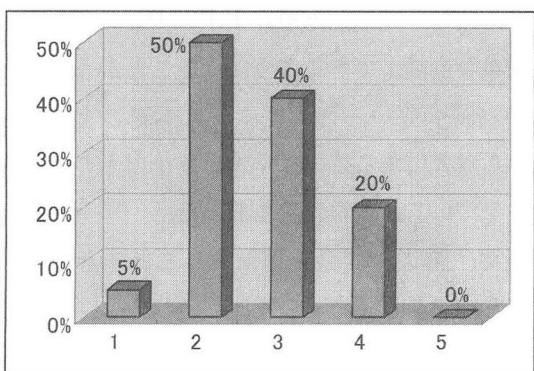


図 3 発話量の割合についての認識（第 1 回目調査結果⁶）

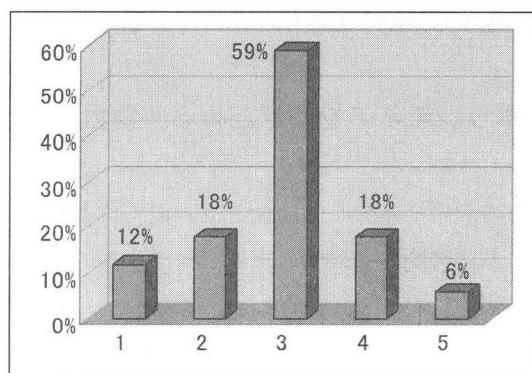


図 4 発話量の割合についての認識（第 2 回目調査結果）

第 1 回目の調査においては、ボランティアは活動時間の半分、もしくはそれ以上の割合で、パートナーである外国人参加者が中心の「おしゃべり」に時間を割いていることが示された。しかし、第 2 回目の結果を見ると、項目 2（私 40 % : 相手 60 %）の回答数は下がり、項目 3（私 50 % : 相手 50 %）に半数以上が回答している。つまり、活動開始直後は外国人参加者の発話量の方が自分よりも多い感じていたものが、1 クールの活動を終えたあとは、自分と外国人話者との発話量は等しくなったと感じるボランティアが増えている。第 1 回目と比較して第 2 回目の結果において、発話量の割合が平均的であるという回答が増えたことは、活動初期は外国人参加者の発話量が多く、ボランティアはその「聞き手」として参加していたという構図から、外国人参加者に発話の機会を促すことが増え、両者の間で発話がより交換的になったことの現れであると考えられる。

では、その発話量の変化と、これまで述べてきた動機と発話内容はどのように関連しているのだろうか。先に述べたように、参加動機には「外国・外国人への興味関心」が掲げられていた。これは第 1 回目の結果において、発話量が外国人参加者のほうが多いということに関連するものと思われる。しかし第 2 回目においては、発話量は交換的なものへと変わり、選ばれる話題もテキストの内容が中心で日常生活に関する事柄は周縁的な話題へと変化している。つまり、活動当初はボランティアの参加動機の要因であった「外国・外国人への関心」と関連して行われていた活動が、二次的な動機であった「支援すること」に付随する活動

が前景化する活動へと変化したのである。

5 ボランティアを繋ぎとめる原動力

自らの意思で参加した活動とはいえ、日本語ボランティアが持続的に参加する理由は何であるのか。アンケートでは、「X会に参加しているなかで、何を『楽しい／うれしい／上手にできる』と感じているのか」について自由に回答してもらい、ボランティアが感じる「楽しさ」という意識からボランティアを地域日本語活動に繋ぎとめる要因を探った。第1回目と第2回目⁷の結果を比べると、ほぼ同じ内容のコメントが得られた。

二通（2006）は、ボランティア活動を継続させる原動力として、外国人との異文化接触を通して実感する学びを挙げている。1回目の調査を行う前に予想していたのは、この質問への回答には、ボランティアが日本語学習を支援したり、外国人から日本の文化や習慣について聞かれたりすることを通して体験した、日本語・日本文化の再発見が語られることであった。しかし、実際には、そのような再発見を答えたボランティアは「外国の方のものの考え方方が日本人では思いつかない発想であり、それが小生にとって良い経験（D）」と語る1名のみであった。この回答者Dは第2回目の調査においても「漢字の語彙、簡略化した書体などについて、日本語と中国語の違いについて話し合うことができたことが印象に残っております。このことが小生にとっても勉強になり、楽しかったと思っております（D）」と、日本語の再発見がD自身にとっての学びとなったことを語っている。それは二通（2006）が述べる「学び」のひとつである「再発見からの学び」であろう。2回目の調査においてはDの他にも「日本人が現在忘れている物事を思い出させてもらい私も勉強になりました（Z）」と、Dと同様に「再発見からの学び」を印象に残ったエピソードとして述べた者が1名いた。

では、他のコメントはどのようなものだろうか。それらは3点に分類することができる。第1は「交流の喜び」、第2は「日本語学習の進歩に見出す喜び」、

第3は「会を運営することの喜び」である。

第1の「交流の喜び」とは、「相手の方と communication が上手くいくと楽しいと思います（W）」、「子どもがいないので、学生たちと話すのは楽しく、文化等、時代等、視野の広がりを感じました（C）」という意見である。また第2回目の調査においても同じく「プライベートでも時々『お元気ですか』と電話をもらうとても嬉しい。また、たこ焼きパーティをし、お返しに韓国家庭料理の昼食に招待された。楽しかった（I）」のように、外国人参加者との交流に喜びを感じている様子が見受けられた。具体的にどのような話題が外国人参加者とボランティアの間でなされてきたのかについては言及されていないが、外国人参加者と接するなかで得られる「再発見からの学び」も含まれるのではないかと思われる。

第2の「日本語学習の進歩に見出す喜び」としては、第1回目の調査で述べられていた「学習者が日本語の力をつけていくことを実感するとき（F）」、「生徒さんが少しずつ日本語を理解してくれて、うまくなっていくのがうれしい（M）」といった意見である。特に入門や初級レベルの非母語話者の上達は、目に見えて現れやすい。そういった外国人参加者の「変化」に自分が役に立ったという感情をボランティアは抱いているものと思われる。これらの「日本語学習の進歩に見出す喜び」は第2回目においてはより具体的な喜びとなって語られる。それは約1年間という時間を経たゆえのコメントであるからか、「殆ど日本語が話せなくても板書したり絵を見せたり、実際の物を見せたりして、名詞、動詞、形容詞（いadj、なadj）と少しずつ覚えていくプロセスは、我が子に言葉を教えるのと同じだと思います。少しできたらほめて、簡単な会話ができるようになることがうれしいし楽しい（S）」といったように、日本語の能力といった点から成人である外国人学習者と子どもの成長とを重ねて見ているような意見もあった。

最後に、第3の「会を運営することの喜び」として、活動の中身自体に喜びを感じるほかに活動の運営に喜びを見出すボランティアがいた。「X会の活動がうまく機能していると実感できるとき（Y）」、「当初

予想以上の学習者の参加が得られたこと（N）、また「眠っている人材を起こしてメンバーに入つてもらえたこと（O）」といったようにである。現に、X会に入る動機として挙げられた意見のなかには、会のコーディネータ役となっているメンバーからの誘いを受けたと回答する者が10名いたことからも、同年代の仲間たちに「日本語ボランティア」という新たな社会的役割を与えることや、活動の運営、人材の発掘という活動自体の土台作りを担うことで、自らのコーディネータとしての立場を確立することに喜びを見出していることが分かる。

上記三点の「喜び」のなかで、第3の「会を運営することの喜び」という回答は予想していなかったボランティアの意識であった。確かにボランティア同士の「横の繋がり」がグループ全体を活性化させるのに必要なことである。そのような意見が出されたことはグループにとっては有益なことであろうが、もう一方の参加主体である外国人同士が会う場所として役に立ったという意見や、外国人参加者の「眠っている」力を引き出すことができたというような意見は述べられなかつた。

では、上記の「楽しい／うれしい／上手にできる」と対称である「大変だ／困った／難しい」ことは何であったかを問う項目へのコメントを見てみよう。それは、「交流の喜び」も「日本語学習の進歩に見出す喜び」を述べるボランティアも、困難なことのキーワードには「日本語」を挙げる⁸。

1回目の結果では、「習慣の違いなどを日本語で説明するのが時には難しい（T）」、「表現の微妙な違い（K）」、「日本に対して普段は気にもしない使い方を聞かれて答えられなくて困った（A）」、「正しく理解しているかどうか確かめられない（I）」、「何の研修も受けず、ノウハウも持たないまま、学習者1名と相対したために、こんなのでいいのかと自問している（U）」と、外国人参加者に日本語を「指導」する上の悩みが語られる。

第2回目の回答も同じ内容であるが、以上のような日本語の説明に苦労するという意見に加え、目立ったのは英語でのコミュニケーション力の必要性を言及

するコメントである。「英語が共通語と思われるのでですが、こちらは中学一年生ぐらいの語学しかありませんので、聞き取れない。こちらの説明が伝わらない。電子辞書で示すものの、どこまで伝わったかなと反省しきり（P）」、「私の英語力はおそまつなものだが、彼女の日本語の理解力はあまり良くないのでやむなく英語ということになる。『感情』は伝わると思うが、テキストを『説明』『正しく理解させる』という点では歯がゆく思う（U）」。これらの意見は、日本語を指導するうえでより適切な説明を行いたいというボランティアの思いを読み取ることができる。そして注目したいのは、「英語」という道具を用いて行いたいのが「おしゃべり」ではなく、「教えること」に注目されている点である。ボランティアの参加動機を振り返れば、外国人参加者からかれらの文化や考えを知りたいという声が上がっていた。その手段として「英語」が挙げられるかと思うが、そういった側面での英語の必要性を述べるボランティアはいなかつた。

上述してきたように、ボランティアは活動を実践するなかで困難なことを各々感じながらも活動を続けている。それは困難であると感じること以上に、楽しさや喜びを感じることをボランティアは経験しているからであろう。それは、例えば「再発見からの学び」や「交流」のほかに、「教師」としての自分や「コーディネータ」としての自分というような役割を見出した結果の意見のようである。森本（2001）は、地域日本語活動のミーティングを通して、制度的に保障されていない「日本語ボランティア」がそのアイデンティティを確立する方略として、外国人参加者をもう一方の対象として「日本人—非日本人」、「先生一生徒」というカテゴリー実践を行っていると指摘している。この視点に加え、新庄・西口（2007）でも指摘したように、ボランティアは「日本語ボランティア」という実践を利用して、ひとつの自己アイデンティティを確立している。

X会のメンバーの社会的背景を述べると、退職者が多く、いわば第二の人生を歩んでいる人々である。かれらの多くは仕事や育児といったことから解放された世代であり、自分の自由に使うことができる時間を他

の世代より比較的多く持っている。そういった時間のなかで、地域日本語活動に参加することが、かれらの新たな社会参加の契機となり、また新たな自己アイデンティティが形成される場とも成り得るのではないだろうか。その結果、個人の経験に基づく興味関心から、外国人の日本語習得を支援するという活動に関わることで、「教師」として日本語を教える。また、会を運営するうえで必要な采配や事務処理などを通して、かれらがこれまでに培ってきた経験を生かす場として地域日本語活動がある。そういった新たな自分との出会いを通して感じる「やりがい」や「人の役に立った」とことによる満足感によって、他者に必要とされている自分を実感するという「ボランティア」として自己認識が、地域日本語活動にボランティアを繋ぎとめていくのである。

6 素朴な期待

自分が行動したことに対して、楽しさであれ辛さであれ、何らかの感情が湧き出てくる。そのとき、人はその感情を踏まえて明日への期待を抱くのではないかだろうか。地域日本語活動に参加するボランティアにとっての期待に、かれらが活動に注ぐ思いを感じ取ることができるのでないかと考える。

第1回目アンケートでは、「X会で、得たいこと／実現したいこと／実践したいこと等はありますか」という質問項目を設定した。第2回目においては、その質問の冒頭に「来年度は」という言葉を付け加え、さらに「日本語ボランティアの活動に関連して、これからやってみたいと思うことはありますか」という質問と、「一般的に、地域の日本語学習支援（日本語教室など）で必要／重要／大切等と思うことは何ですか」、「一般的に、地域の日本語学習支援（日本語教室など）のボランティアとして活動をしていく上で必要／重要／大切等と思うことは何ですか」という問い合わせ試みた。後者の二つの質問の意図は、X会という活動を一旦脇に置き、一般的な考えを述べてもらうことで、X会の方針に捉われない意見を抽出したいというねらいであった。

以上の質問項目から得られた会の今後の意見は「内向きの志向」と「外向きの志向」とに分かれた。第1回目の調査においては前者の傾向が強く、第2回目の調査においては後者の意見が多くを占めた。かつ「外向きの志向」は第2回目の調査で尋ねた「一般的に」と語られる地域日本語活動とボランティアに必要なことにも関連していた。

先にそれらの内容を説明すると、「内向きの志向」とは、地域日本語活動で実践するうえでの技術や能力を向上させたいという意識である。反対に「外向きの志向」とは、単に「日本語」を教えることだけではなく、在住外国人と接することで見えてきた日常生活の不便な点について支援していきたいという感情や、そこから派生して自分たちのグループや地域日本語活動をより広範な活動にするための方策を提案しているというものである。

まず、「内向きの志向」の内容から見ていく。第1回目の調査のコメントからは「日本語教授法をさらに勉学したい（N）」、「日本語をもっとうまく教えられるようスキルアップして資格を取り、海外で活躍したい（A）」といった自分の日本語を教える技術を向上させたいと述べる者と、「日本語を教える資格をとったとか、あるとかそんなことは何の役にも立たないとということをボランティアの皆様に知ってもらいたいと思います。やはり英語が必要です（J）」といった個別の英語能力の必要性を述べる意見もあった⁹。他方、「外向きの志向」として挙げられるのは、「単に日本語だけではなく様々なサポート活動組織ができたらなあと思う（H）」や「外国人に対する、よろず相談承り所ができればよいと思っている（F）」のようなコメントである。特に、この二人のコメントからは、活動を通して在住外国人が必要としていることが日本語学習だけではないことを実感し、地域社会全体として何が必要かを考えた経緯が読み取れる。

第2回目の調査においては、日本語を教える技術の向上を願う「内向きの志向」は述べられず、上記の二人のような生活支援や日本語学習支援という側面からより具体的な提案が述べられていた。それは行政の役割を述べる意見と、第1回目の調査と同様にボラ

ンティアが担う役割の提案である。前者の行政の役割としては、「場所の確保等の点で、ボランティアの活動には限界がある。行政等の協力があれば違った展開が期待できよう (Y)」、「行政、地域、関係施設等に対するアプローチ及び、それ等の対応の向上が重要視される (D)」と、日本社会における在住外国人の日本語学習・生活支援がボランティア活動だけでは不十分であることを示唆している。

さらに、後者のボランティアの役割については二種類の意見に細分化する。それは、自分たちのグループは「日本語学習を支援するだけの活動ではない」とする意見と、その意見とは相反する「より日本語学習を行う活動にしていかなければならない」という意見である。前者の意見を述べるボランティアは、地域日本語活動で必要なこととして「異文化の中で生活へのとまどいや、困っていることへの助言等 (K)」と述べ、その内容として交通機関の利用方法、行政機関より発刊の文書、街の中に書いてある生活上必要な案内、注意などの表示の読み方が挙げられていた。また、「地域で生活する人々には大阪弁の聞き取り方も必要かな (P)」という方言に注目する意見や、「できれば教室での学習だけではなく、実際の買い物等を通して、日常生活での生きた会話を実践できたらと思います。教室での学習が実際に使えるか? 疑問に思うことがあります (S)」と言うように、互いに同じ地域で生活する住民同士であるからこそ実現可能な日本語学習支援のあり方が提示された¹⁰。このような具体的な場面の提示は、恐らく回答者自身が直接関わった外国人参加者の声が反映されたものであると思われる。

一方で、後者の意見としては、「日本語教室では同じレベルの学習者を集めて、プリント・教科書等と一緒に勉強していく (C)」、また「善意のボランティアであっても、善意だけでは学習者の役に立てるとは思われない。ある程度基礎訓練が必要。聞いているととても上手に教えられる方と、そうではない方もおられるように見受けられる。せっかくの学習者の時間に、こちら側のレベルで当たり外れがあるようなことは避けられるなら避けたほうがよいのは当然 (U)」と、外国人参加者に均質な技術を日本語ボランティアが提

供することを提案している。もちろん第1回目の調査においても、日本語教授法のスキルアップを望む声はあったが、それは個人の技術向上に主眼が置かれていた。しかし第2回目の調査では、その声が活動全般的なものとなっているのである。

7 まとめ

地域日本語活動に参加するボランティアは、外国・外国人への興味関心に端を発し外国人を支援するという願いを「日本語を教える」ことを手段として叶えていく。そして「日本語を教える」ことを通して実感できる「やりがい」という感情を自分の存在価値に同一化させることで、より深く活動に関わろうとする。その結果、国際交流的な関わりを求め、「在住外国人が日本語を学び喜んで帰ってもらえばいい」と述べていたボランティアは、「学習者の役に立ちたい」といった日の前の外国人の言葉の学習に真摯な態度を示すようになる。それは、母語話者の住民が非母語話者を持つ純粋で素朴なホスピタリティの表れであろう。そして、ボランティア自身のなかで、直に接した外国人参加者の日本語能力から目に見て実感できる「やりがい」と「より深く外国人参加者の役に立ちたい」という意識が循環する。その循環から副次的に生じるのは、「日本語をもっと教えること」である。すなわち、ボランティアの「やりがい」の循環は「教えること」の固定化に連続するのである。

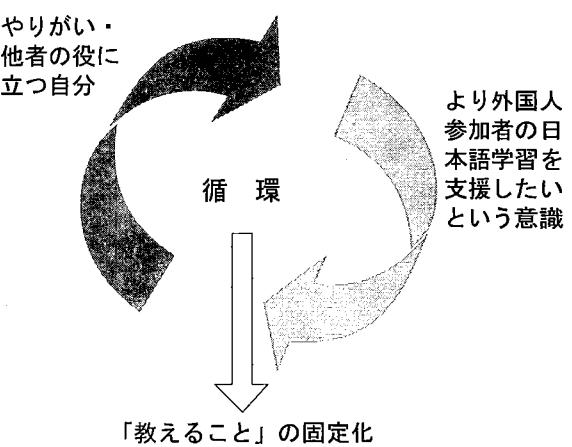


図5 支援を通して得られる「やりがい」の循環と「教えること」の固定化

このようにボランティアが「教える」側に固定化することは、裏返せば、外国人参加者を「教えられる」側に位置づける。この意識の変容は、ボランティアを「先生」として、外国人参加者を「生徒」として位置づけることに一役買うことになり、さらにその非対称的な関係性を固定化させる。その結果が今現在の日本社会における地域日本語活動のひとつの姿であろう。皮肉にも、ボランティアが外国人参加者の日本語学習に役に立ちたいという思いが募れば募るほどその傾向は、色濃くなっていくのである。

しかし、ここで批判されるべき対象はボランティア市民ではない。ボランティア市民は外国人参加者に「教える」よりも、むしろかれらから「教えられたい」とも願っていた人々である。ボランティア市民たちが「教えざるを得ない」状況になったのは、外国人市民の日本語学習をボランティアの支援に頼り切っているという日本社会の問題点からである。ボランティア市民が外国人市民から学ぶ、ということをより深く実感できる活動にするためには、ボランティア任せではない在住外国人の日本語学習の保障が日本政府によって公的に行われることがまず必要である。

注

1. 本稿で扱うグループ名、及び大学名は仮名である。
2. 2点以外の回答として、「手伝ってほしいと言われたから (I)」、「友人が活動している内容を聞いて (U)」、無回答 (M) の3名であった。
3. 例えば、地域の国際交流団体、老人大学や雇用能力開発機構で語学や国際交流に関する講座や、日本語教師養成講座を受講し、日本語教育能力試験に挑戦した経験などである。
4. 質問項目12は、自由回答記述の部分である。第1回目の調査においては、回答数0であり、第2回目の調査では3名の回答数が得られた。その内容は次の通りである。「学習者の親族が来日することについての生活相談（家具の購入、アパートなど）(J)」、「質問1. 2. 3のようなこと (H)」（筆者注：Hの言う質問1. 2. 3とは、筆者がア

ンケートで尋ねた動機および、活動中のエピソードを聞いた質問1から3のことである。)」、「質問を持ってくることを宿題にしました。自分で見つけた日本語の本、マガジンなど、漢字で解らない文字など (Y)」。

5. これらは、日本の生活や習慣を話題にしているかを尋ねるもので、項目7ではボランティア自身の生活や習慣を、項目8では一般的な日本人の生活や習慣を話題として取り上げているかの質問である。
6. 第1回目のアンケートの回答者は20名であるが、この設問項目に関して1名の回答漏れがあったため、19名の回答を集計した。
7. 第2回目の調査においては、まず「約1年間、X会で活動しているなかで、印象に残っているエピソードや苦労したことや楽しかったことはありますか。それは何ですか。」という設問を設定し、順に「大変だ／困った／難しい等」と思ったこと、「楽しい／うれしい／上手にできる等」と思ったことを尋ねた。このような手順から隨時出てきたコメントを記述することにする。
8. 第3の「会を運営することの喜び」を感じるボランティアは、1回目の調査では「団体としての教室運営の難しさ (N)」というようにグループの責任者としての役割を担ううえでの苦労を語る。また当事者以外にも、「代表になって頂いた方の苦労は大変だと思う (E)」、「私は幹事役をしていないので、困ったことは特に感じていないうが、いろいろ苦労はあると思う (H)」というように、コーディネータの苦労を窺う意見が見られた。第2回目の調査では、そういった苦労やそれをねぎらう意見は見られなかったが、「感情のもつれで出てこなくなったボランティアがいること (O)」や、X会のメンバーに、ある市民講座の同期生が多いことを挙げて「良くもあり、何か抵抗もあります (Y)」というボランティア同士の人間関係のもつれに関する意見が述べられていた。
9. そのほかの「内向きの志向」として、「今まで通

- り続けられたらよい（V）』という現状維持を望む意見や、「朗読に興味があるので、別途機会があればしてみたい。演劇体験も少々あり、寸劇の演出などできるといい（G）』という自分の経験を生かしたいというコメントがあった。また、「内向きの志向」「外向きの志向」以外のコメントは、「特になし（Y）』という回答であった。
10. メンバーの一人は、パートナーである外国人参加者から生活を整えるための支援を要請され、リサイクルショップやスーパーマーケットなどを二人で回ったというエピソードを紹介し、「日常生活支援が重要であると今回痛感した（H）』と述べている。

本稿は大阪大学大学院言語文化研究科に提出予定の博士学位論文の一部を加筆修正したものである。

参考文献

- 御館久里恵（2007）「外国人研修生の日本語習得と、受け入れ企業や地域との関わり」平成17年度～平成18年度科学的研究費補助金〔若手研究（B）〕（課題番号：17720124）研究成果報告書
- 新庄あいみ・西口光一（2007）「地域日本語活動の現場から」、『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』大阪大学留学生センター第11号, pp.57-64.
- 田中 望（1996）「地域社会における日本語教育」鎌田修・山内博之（編）『日本語教育・異文化コミュニケーション』凡人社, pp.23-27
- 二通信子（2006）「国内の日本語学習の場の広がり」独立行政法人国立国語研究所（編）『日本語教育の新たな文脈』アルク, pp.10-32.
- 野元弘幸（1996）「機能主義的日本語教育の批判的検討—「日本語教育の政治学」—」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学II）』第45巻 第1号, pp.89-97.
- 古川ちかし・山田泉（1996）「地域における日本語学習支援の一侧面」『日本語学』明治書院2月号 vo 1.15, pp.24-34.
- 森本郁代（2001）「地域日本語教育の批判的再検討—ボランティアのカテゴリー化を通して」野呂加代子・山下仁（編）『「正しさ」への問い』三元社, pp.215-247.